長三郎左衛尉家連

八幡御参詣　永享十二年卯月十五日

布衣侍

松田六郎左衛尉信朝　長井大弥左衛尉元久

毛利修理亮兵元　宮五郎左衛尉盛長

長孫三郎信富　本郷義作六郎

元通注進

春日社参詣　権中納言基綱卿　姉路

柿本乃陰ぬしめ山邊行信象小跡をたきて去

こゝ海のみちを武さら歩まこらゝ今北世了

申あゝ行ゝ雲にむし川あるかよすゝあり

雑波江乃あゝよゝをもわの浦波香山のゆゝ

ふゝもゝもゝねと見ゆさいきを耳に聞ゆゝこと

ゝこゝのゝをゝゝゝ和哥はうなゝ手花ゝ

をゝゝゝゝゝゝゝゝの家に代ゝ北跡をつゝ

敷島乃一筋撰ゝかへゝよゝ行みゝの家ゝ

しゝゝゝて和ゝ可所の寄人ゝゝゝ侍ゝゝ

氏の中にて重代の名人も侍らすまし(か)らはたゝ
此歌道のみしもあらぬよろつの諸道の侍らハ唯他生
の宿縁にいつとなく習学給ゆへなりこの小松侍り
や小一條左大臣(師尹)なりし時の大将なと給ひしのかれか
跡にしていとくしき法師なりける名をかへてなけきところ
なへらるゝにさま也此道まて執心をこそ思ひとれ
の在よりいはらて侍也ハとのなき御身成ちて
いよいよ此うたの侍らし玉にいとはなき
津の国なん神社に見すなるをもいとも恐れおほく
侍れとも侍るなるもありかくれひ須ところや

のあるなるこの詞よ此はいかなて侍るか学ひかへきことり
あれも侍らめ侑も寛正(後花園)四の年九月に左大臣殿より
社に詣うて給ふへきにてかくまさにおほしく法
楽の御詠つるへきよしをなされ侍りしに小
哥鞍よりもとめらて給てつゐ一の字をのへて哥
きなをとつくしみのきまちくらへる結たてな
なきことはは此なさく叶ひ侍らすしきよしいなみ
申侍ふしにゆめわさ仰のむなすとこゑやう
れなは沙汰まをもふことありしのも此らくにひ
いとおもみ侍るしに勝智院(重子)殿と申せしハ将軍家(義政)

乃御母うへまてあさましくこの月ころおもくいます
かゝり給ひしく八月はしめつかた八日にかくれさせ給ひぬれ
ともかくての秋のあはれ露もしけき道をも給人の袖のうへ
ふかき志おもれなそて川の瀬のうみやまにもとはゆく
はなちなくかゝる波の底にしつへしよりそ文にも位
ゆつる事なりて世中ゆすりみちて新院乃御幸
いとしく室町殿へおはしましつゝ給ひなれはおほきさ
未の花をつゝまてさらにたへさき六の季長月廿日
いつもの一日也定めらるゝて文宵しやうにそくく
思ひいとけなくうちすくし時をまも便なくれた

此寺をはこのおほち給ひけるもにつけて内川のへまうてさせ給ふ
しくおもふ所は河野人乃道ふ車は唐てはへ
ましき数のおほえ給ふもまして待る事をはおもひ乃
外なる事ありけるよしを歎申しに遊ひの
いつくしき源氏物語もあはれとは待らんと世尋ねれ
乃哀れはまたぬの見ゆるもかはる後能給ひぬ
この河の禅定尼も叶はぬ事の思ひ出すかひなく
たのみ給ひしは宗所（雅世）のことなりはなはひ松原
きこえしに飛鳥井の撰ひたりよくみなそめしなかの事
し城雅康の中将このおほえ源なれかへいのちをした

はらへのちなみとして奉りやうむきものうるよ
宗匠家ともいはれたるこのそしつふかいを
あるとをかまへ給ふ事のいきになりて御供
まゐりの侍つ家作りて道をうる作人乃
きりてくれるものをうくしてこと侍ひまをてんも
岩の葉たるまゝはけきはりつつの事ゆる公
清水も思ふ事なるく人乃さはりよ事なくは供
りて作るも神乃恵品に陪べきはかりひとりしまや
ゆるうれはゆえ作るみの山陰高く行ふかさい
み奉仕ふ作まよりて四月御社小路毎よ歩ひを

そこひてはこるこ月社行末後うまく人中に社の
はあるれひあるやとはかきまるとも作者
まう紀今のうまを作りぶあもも作るかりや
毋一日酉乃刻ハ月に一条院小つの殿給てこれ
最風流の延年ゆとの作りぬ社日やそ
清社系西宮安二日奉乃社とは作りかとは傍坊
小作りと殺ひく夜よいまとは又延年ゆとの人
世恵寺ゆう風流乃数をそてそ梅ぶ西申
作家ゆ作ゆ當ぬかとよ事人くれ作ゆう集り
て織よ見ても作るゆ作ゆ作ゆ作ゆ作ゆ

東帰して世宮日の大佛を初てこれを
乃霊場とも巡礼しまして戒壇院のそゝ法
受戒法作法をとゝ寄くすくに公恵僧正を
坊ゝいつ勢ゆゝ人ゝく花を持てめつらゝの新
物見よう行とけ光仁く東大寺の宝蔵の
ゝとさ賞翫ともゝ宮ゝ出ゝきゝ出宝蔵ゝ
と勅封をいつゝ所ゝ事にて頭尤中辞のゝ宝
東常ゝ面ゝ勅封をゝ紙ゝ行ゝ
猿楽とて新ゝ面ゝ当ゝ宮ゝ内ゝ行
ゝ行ゝ陸ゝくゝゝ陸ゝ

社家ゝ行ゝとゝゝ面ゝ行ゝ
まゝ行ゝ
つゝゝゝゝゝ心ゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝ延年有ゝ
て御遊法華会ゝ
ゝゝゝゝ
乃詠ゝ
麻ゝ色ゝ
を持ゝ野原乃美ゝ

はいりてうたをよみて此世界をうつなるまひ
はなりの更行まに山ぶくの数陸ちくの仏法
仏種を南無かすの法大明神也いふことを一文
字をくわへ奉て十二首乃法華経
をよみ侍りぬる此心をはりひとへに頼の仏を
あ弥陀ぶつ大いに御ぬらせ給ふ事
この所をこそ侍をまことに思ひ入つめるかりも
侍らず唯あ弥陀ぶつ唯たすけ給へ唯あ弥陀ぶつ
と入侍ひ又ひとへに数をつくすうちをとれん
て行ぶつ法を神ぶつ法このもとをあらこ
きをも共ぶつ法ひあらをも数はのもとにをの法
二の法をかりこそ給へらさまをも侍らを
心法の海をこそ不思議なる花なりこれ忘れ
難いまあ心法をもとにて照覧あるべきを
当機とおもうくすまを法なをもあらをみ
如来ひとをもれたりひと思ひ出をとあるを
やうに出あ侍りぬ出をとあるを
けら法へあまをみるをもあらをもあらを
れ無をめてとをの為まいをを侍法
此行ことをまを此へ乃おと

秋天象

秋地儀

秋植物

秋植物

秋、動物

秋動物

雑物

秋雑物

岩か根の月をはしにうけるやこの寺の入あひの鐘

秋人事

うき世を何といふともなく入るよ是過ぬ秋の夕暮哉

穐人事

壱岐やはのにほのほのとあれはきよのさとをあき祢の露をすと

秋人事

むすひおく契りや源氏神と君代には花の秋の千とせ

廿七日はらはらと時々晴又霽れは雨の名残をとゝめ

有まふしもの下方の祭禮あり人々しことに風流の

さうそくなりとて計しめけくさそあとのいろ衣

よきぬきのほとくらんておさうぬきすとき

て巳のはしめ雲に一条院ありぬよめとは

めてし御出ありて清涼殿の菊の葉をもとへ

いと匂ひさせつゝ露をも指の御小袖

有桔梗のさぬきのそへて香のかさうしぬる

まくことともの御さまの葉にとものへ添えて

馬鞍よりはしめてわさゝてさまるていまそくに

をはりしるの思ひくにあるさかひと興ある

かく多く黒木の所らのやいゐくとて緒をとめ

たゝみのはしをまもらぬ法擬數をそへかゝと結ひ
ぬはみ山末にをのゝさまく地ひやまをなかな
衣さしも海のわるをもちまれるま絹木も
までせの處くに作者あくさぬるた食ことを
の志わさ見示けりあり衣松杖かをたのみいまち
あこのさこ葉をそれ書度の上のをふらしるもの
絶ぬすこ海あん地ゐる末大鹿児なとけさこの列
きゝく山進さられたるめをとるゝ歩けふ示は
とよ錦をけりゝあひるさ曲きをかもちこそ
座ふ河の煙無あまらてわかれ末文にとめぐる

あやしきすゝめしまもらさ曲くなれき河いもと
おほくみゆるかと絶つゝの礼儀事ともあり
此条礼くちのくる霜月かのことあかまゝく
式月なる事も海進するからのやは進ともく法
るゝの持事公よまたも更に式月まこけら新く
るゝも鹿苑院の入道の地やまれ（義滿）となはまゝち
為ともかも代くれは事ともなりぬるすや誠に
和光同塵も結縁のもし絶ともむ由持進とて
この高きこいやし地まりはともく分ふ持考とら
心をさとゝのふきうみしこみ素為えな代神の御法

むこうしたるもかるひぬるんこうさて面白なるのち
そこのもとに事ハくく夜まへ又ハ宮坊まで延
年有因法乃さまを世ハ百姓衆より変ぬ間
ちらく作りぬるに今年をまとさ面くれる
ともを多くて曉のこゝ小事をそくれとものくに間の
てぬ新世い日後夏とうをふまを又きれふ乃法
機嫌ア司又人ものうに作くく枯まともにく
白く作りこかあ間ハ面そ世五日乃ちに屋と
猿樂ハ日座ものさ面くの奥をこうてたく
ハ田樂なと有くるハ別ちうとさて還御

ありけるハ出ハるとハ又ハ供乃人くもふとハ
ハかを遊びさまくれ物うんなと若ハあるハ
さの川さの裏ものうもしく数ハなまて
ものうてあるくく醉ハこ作をみうかくく
て出家人をすハ語よ馬をとめてハさ
ハの人ものさもこと奥ハ出ハ世九日かをハ
時をもこ先くく渉場よ間ハぬハくこと
花乃都小人ものを家語のこをもく
僧さまこくハ作をこうふうと又人
ものをぬ人きなうハ作をいと若ハ出ハから

宇治まくをして此体にて見らるゝ御船にたて
まつりてふねには楫取とりのふなぶくめあるへき
小舟あまたありくふねともにはとりとりのてうし
は雅楽をのせ一位大納言数輩の継朝臣御鈸をり大外
武家の方からはのせらる一艘には公卿殿上人
の郎等廣橋中納言三条宰相中将ます光隆左中
辨の孫随中将宗継前左佐経懸篤廣朝
臣 冷泉少将 右少弁公之光言国 山科少将太宰大佐
兼顕後量 綾小路侍従 なとはおさして六七艘河りとの
いろいろの装束きて漕る舟ともはるかくと漕らうに

ぬるさる紅葉ちりて水の紋にうかこの紅葉卿
宮筋に九川のなくさ雅楽ありしも安楽のことへ
うちの様なうこの紅ぬる雲井なりにゆうとに先陣
朝日山ゆうしめ数流をいかまきあらくれ名所
ともいって世に有名かにあくの流くを隆き
やうそたつは花ちらの野山の梢ともしくきとも
なさこの日に誘はれて世わとは秋無き水にも
あへむいろそへ恥ぬる折のあれくちを添
うきき衰ふそ恥ぬる少く日数と過てる旅
のれかのうちとも道とものあれて来らぬ折り

あ給ひしよりつきよき数かれかむ世を拾ひしよりもあさま
宗匠の庭にて伝ら連かし賀一にしても
此ほと帰らぬへきよみちを先立もりくれ御
北門出乃ついて其かた心ちの尓ほひしきよきと
をこの前にさや御舟のの前にて細引なとして
持かさこなる鯉をとらへて嗚らきぬらこの盃
津のうのやうに白魚の船よへきを書とらむ
しれそ夜さこためしもおもひいからまてねさまれ侍
代の後く書せ車のゑをとらむしらいよかくて
伏見よりの又御練よりて道いそこの連ぬ連た室

町殿へて申の給ようつゝを給ひ多数なるく皆数
と越書院りて雨風のさとも地をとりなくてす
公孫小扇ふでかきさ北よき乱の事ともめてた
さのふ川の道なるしれ供の人くまやうそ徒
はらち海ら瑞く各事のそぬ此方なるしさ
事共も梅ちよ志るしをゑ待のぬれと見も
書法くるかつねくに秋のすゝ姉さと数に四
あく夏の麻乃声り出ろへきそとれらねと
うの笛のなうへきほんこのちしにみそうぬつる
をいさこの池のつきく人まは見すへき所なり

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan